幽霊バス

御劔剣次

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幽霊バス

【Ｎコード】
Ｎ０８８８Ｂ

【作者名】
御劔剣次

【あらすじ】
二つの大きな国が争う世界。片方の国にある噂が流れていた。それは、幽霊が出るバスがあるということである。そのバスに乗るファランス。そこで出会った女性は、強い未練を残していて、成仏することができなかった。そしてファランスは、とある事情で、成仏するのを手伝うことに……

（前書き）

正直９０００オーバーどころか１００００近いんで、疲れます、でも、読んでください！

人が戦争を起こしてはや五年。ゼネイル帝国とルーファス国の戦争だ。
どちらも大規模な軍隊をもった国なので、その戦争は一戦ごとに大量の死者を出していた。
無論、死者の半数は一般市民である。

「あーあ、やんなっちゃうね、本当」
青年が一人、バス停留所でつぶやく。ここから出るバスは、後方基地『バーバラ』と補給基地『ブエルコ』、中規模都市『ルカ』を繋いでいる。
しかし、午後二時三十七分のバスには誰も乗ろうとはしない。なぜならば、霊が出ると噂されているからだ。
「まったく、幽霊の何が悪いんだ？」
そのようなことを軽々と口走る青年。彼が待つのが、そのバスである。
青年の名はファランス。
これでも軍人で、階級は中佐。
「あっつー……ん、来たか」
待ち望んだバスが来た。
ファランスは扉が開くと、さっさと乗り込んだ。
「ありゃー、今日も満員か」
彼はバスの中を見回した。誰も座ってはいない。
「これから一ヵ月は満員だ。乗るんならそこに立ってな」
頭を掻いて困惑しているファランスに、バスの運転手が言った。
「マジか……」
ファランスは頭に手を添えた。

「ああ。あんたらが始めた愚かな行いのせいでな」
バスの運転手の一言に顔を臥せるファランス。
「……まあ、おまえが始めたわけじゃないがな」
慰めのつもりだろう。バスの運転手は、そう呟いてバスを発進させた。
「座れるとこねぇかなー」
ファランスはバスの中を再び見回した。座席には誰も座ってはいない。ただし『人間は』である。
ファランスには見える。座席に座る霊たちが。
「……あんな小さい子まで……」
ファランスは、母親にしがみつく子供を見て呟いた。子供はファランスを見たあと、母親の肩に顔をあてた。
「すみません、死ぬ前から人見知りだったもので」
母親が頭を下げた。ファランスは笑って、おかまいなくと言った。
霊は、人間の思考をある程度読むことができるので、自分たちに害をなすかどうかを判別できる。母親は、ファランスは害をなす者ではないと判断したのだろう。
「ないかなー空席……ん？」
ファランスが見回していると、座席の一つに少女のような、幼な顔の女性がすわっていた。しかも、その隣にはしっかりとした、誰もいない空間が存在した。
つまり空いた席である。
「あの、すみません。隣、いいですか？」
女性はファランスを見たあと、どうぞと言った。ファランスは、ありがとうと会釈した。
「あの、私たちのこと、恐くないんですか？」
女性が尋ねてきた。ファランスは当たり前と言わんばかりに笑った。
「ああ、まあな。昔から見慣れてるから恐くも何ともないな」
ファランスは欠伸をして、座席に深く座った。

「あのー、お名前は？」
不意に女性が尋ねてきた。ファランスは目だけを女性に向けた。
「俺はファランス」
それだけ言うと、目を瞑った。

「起きろ。終点だ」
バスの運転手に起こされた。
「んー、終点か」
ファランスは頭を掻きながら座席から離れる。バスの中は誰もいなかった。
「んじゃ、帰るかな」
「待ちな。バス賃」
バスの運転手は料金表を指差し言った。
「ええと、って高くなってる！」
ファランスはこの前よりも数字が上がった料金表を見て、言った。
「こいつも戦争のせいだ。燃料代がかかるんだ。まったく、人間は愚かだな」
バスの運転手は腕を組んで言った。ファランスは苦笑いで口を開く。
「黄泉の案内人も大変だな」
バスの運転手は苦笑いをした。

次の日の昼。いつものようにバスを待つファランス。仕事は早めに切り上げている。
「お、来た」
バスが来るたびにいつもそう呟く。別に意味があるわけではない。

「おっす。今日も満席か」
バスの中を見渡して言う。目を運転手に向ける。
運転手は親指をたてて後ろを指した。
「ん、なんかあるのか」
ファランスは運転手が指差したほうを見た。そこには、昨日の女性がいた。
「ありゃりゃ、未成仏」
ファランスが頭を掻いた。これが、彼が困ったときの癖である。
「仕事だ。任せる」
運転手はそう言うと、バスを発進させた。
ファランスは頭を掻きながら女性のもとに近づいた。
「あー、んー……隣いいですか」
「あなたは昨日の」
女性は笑って、どうぞと隣をさす。ファランスは座る。
「これも何かの縁ですから、お名前を聞いてもいいですか？」
ファランスが慣れない口調で言う。それを感じた女性がクスクスと笑う。
「私はエレナです。あの、話しにくいようでしたら、いつも使われている言葉でいいですよ」
「そうですか、じゃあいつもどうりで。よろしく」
ファランスはエレナと握手した。
「あんた、昨日からこのバスにいるな。なんか強い未練があんだろ」
相当失礼な言葉でファランスが尋ねる。エレナは急に笑顔をやめ、うつむいた。
「ええ、まあ……」
「よかったら、よかったらでいいけどさ、その理由を話してくれねぇか」
ファランスは横目でエレナを見ながら言った。エレナは、わずかに首をかたむけてファランスを見る。
「いや、大したことじゃないですから」

エレナがそう呟くと、ファランスは不機嫌な顔をした。
「大したことじゃなかったらここには残んねぇよ。話したくないならそう言えよ」
ファランスが顔を背けた。エレナは、ファランスが怒っていることを感じ取った。
「……すみません」
二人の周りにはいやな空気が漂う。運転手はバックミラーでそれを見て、ため息をついた。

「五周だ」
運転手はファランスを叩き起こして言った。
「は？　何がだよ」
ファランスは涙目になりながら頭を押さえている。
「あのエレナってやつだ。このバスが五周するまでになんとか成仏させてやれ」
深い黒色の瞳で、深い闇を見つめながら運転手は言った。外はもう日が落ちて、真っ暗だ。
「でないと、あの魂は闇を彷徨うことになる」
ファランスは急に真剣な目付きになって運転手を見上げた。
「闇を彷徨うって、どういうことだ？」
運転手はファランスに目を移した。
「おまえらでいう『地獄』に近い場所に行くってことだ」
ファランスは口を開けて驚愕した。
「こうしちゃいらんねぇ！　すぐにエレナの死亡前のデータを集めなきゃ！」
ファランスは立ち上がって、風のようにバスから降りた。運転手がそれを見送る。
「……料金はツケだな」

「うーん……名前だけじゃ、どこに住んでたとか、どんな職業に就いてたとかわからないよ」
情報操作員のジアシャスが、難しい顔をして言った。
「もっと絞り込める特徴はないの？」
ジアシャスはファランスを見ていった。ファランスは、忘れてた！　という顔をして、急いで口を開く。
「そういや軍服を着てた！　襟に少尉の階級章を付けてた！」
ジアシャスはファランスの話を聞きながらキーボードを打つ。
「……三人出た。あと少し。他にはないの？」
ジアシャスはコーヒーをすすった。ファランスは眉間にしわを寄せる。
「……たとえば髪の色とか、さ」
ジアシャスの助言に素早く反応する。
「たしか赤！」
ジアシャスは最後のキーワードを入力した。
検索結果、一人。
「でたよ。名前、エレナ・ジャリコフ。所属部隊、グリーンマイルド隊、突撃専門だ」
ジアシャスはコーヒーを飲み干した。ファランスを見る。
「基地の場所はルカから百五十キロ東だよ」
ファランスはガッツポーズをしたあと、ポケットから一枚の写真を取り出した。
「ほらよ、『リリアン』の会場限定特別製生写真」
「サンキュ！」
取引は成立した。二人は握手した。
「さて、そろそろバスの時間だな」
ファランスは時計を見ながら言った。

「またサボり？」
ジアシャスがにやけながらファランスを見る。
「バカ、ちゃんと仕事終わらしたよ。出撃命令出ないかぎりは帰れる」
ファランスはそう言い残して、早々と情報処理室を出た。

午後二時三十七分。
「さて、と」
バスに乗り込む。ファランスは目的の女性を探す。
いないことを祈りつつ。
「……そう、うまくはいかねぇか」
バスの前方右側にエレナを見つけた。
「よう、エレナ」
ファランスが、まるで昔からの友達かのように挨拶する。エレナも軽く頭を下げる。
「大事な話があるんだけど」
座るや否や話しだすファランス。
「はい、なんでしょうか？」
エレナは少し驚きつつ返事をする。
「……おまえの未練のことだ」
「え！　な、何を急に……」
ファランスの言葉に動揺を隠しきれないエレナ。ファランスは言葉をつなげる。
「教えてくれないか、それを。力になるからさ」
エレナは下を向いた。目に悲しみを湛えながら。
「……」
重苦しい雰囲気が二人を包む。
先に沈黙を破ったのはファランスだった。
「もう三周目なんだよ！　このままだったら、おまえ、闇に落ちる

ぞ！」
　ファランスの剣幕に目を見開いて聞くエレナ。
「あと二周しかないから、さっさと成仏しないとまずいんだ。だから、教えてくれ、心残りのことを」
　ファランスは真っすぐにエレナを見つめた。エレナはファランスから視線をそらしている。
「……頼むから、教えてくれ」
　ファランスはエレナの肩を掴んで、優しく、力強く言った。
「……その、私のいた部隊に、お付き合いしている方がいるんです。お名前はジンといいます」
　エレナが、ファランスから視線をそらしたまま口を開いた。
「ジンさんはとてもいい方で、私に優しくしてくれました」
　エレナの目にさらに悲しみが募る。
「いつも明るくて、ジンさんの近くにいるだけで心が暖かくなるんです」
　ファランスは黙って、真っすぐに見つめながら聞いている。
「ジンさんは、この戦争が終わったら結婚しようと、私に言ってくれたました」
　エレナがより一層悲しみを湛えて言う。
「ですが、私は突撃部隊に抜擢されて、彼と離れてしまったのです」
　エレナは顔を上げてファランスを見た。
「ですが、私が前線に行く時にある約束をしたんです」

『もし、私が死んでしまったら、会いに来てくれますか？』

『会いに行くって、どうやって？』

『あの、【幽霊バス】をご存じですか？』

『ああ、聞いたことはある』
『では、もし、死んでしまったら、そのバスであなたが会いにきてくれるのを待ちますね』
『わかった、約束するよ』

「そう、なのか」
ファランスが呟いた。エレナは再び目を逸らし、座り直した。ファランスに肩を掴まれて、体がファランスのほうに向いていたからだ。
「あの方は……ジンさんは必ず来ます。……約束、しましたから」
エレナは窓の外に目を向けながら言った。自分に言い聞かせるかのように。

「……高……」
ファランスは料金表をみて呟いた。
「昨日と今日の分に利子付けただけだ。払わなかったら『あの世』に連れていくぞ」
ファランスは苦笑いし、指定された、いつもより三倍近く高い料金を払ってバスを降りた。
「はぁー……世の中厳しいなー……何て言ってる場合じゃないな。急いでジンってやつに会わなきゃな」
とりあえず明日と心でつぶやき、帰路に着いた。

「アルバディア大佐、入室許可を」
ファランスは鉄の扉の前に立っている。
「ああ、入れ」
室内から女性の声が聞こえてきた。
ファランスは扉を開くと、失礼します！　と敬礼して入室した。
「どうしたファランス中佐、おまえから尋ねてくるとは珍しい」
アルバディア大佐は報告書を書く手を止める。
「いえ、有給休暇をもらえないかと思いまして」
敬礼の形を崩さずにファランスは言った。
「ああ、まあ楽にしろ」
ファランスは敬礼を崩して気をつけの態勢をとった。アルバディア大佐はそれを確認して口を開く。
「それで、有給休暇が欲しいと？」
「はい、今日一日で十分です」
ファランスは付け足すように言った。
「……無給ならいいが」
アルバディア大佐は、片方しかない腕で肘を突き、頬杖をした。
「あ、あの……」
「おまえは今年の有給休暇は使いきっただろう、諦めろ」
ファランスは苦笑いし、ありがとうございます！　と敬礼して部屋を出た。
「……やっぱ美人だなぁ」
ファランスは自分を殴って気を取り戻し、走りだす。

ファランスは駐車場に来た。
「貸さんぞ」

「まだ何もいってねぇよおやっさん。あんたいつエスパーになったんだよ」
駐車場に飛び込むなりいきなり拒否されるファランス。おやっさんと呼ばれた老人がファランスを睨み付ける。
「貴様がここに来るということは、車を借りにきたということだろう」
おやっさんはスパナで左手の手のひらをテンポよく叩いている。
「まあ、そうだけど、なんで貸してくれねーんだよ」
ファランスは不満たっぷりに言った。
「貴様に貸して無事に帰ってきたことがないだろう」
ファランスは苦笑いを浮かべる。
「いや、まあ、そりゃ……たった三回だけだろ？」
「その三回が問題なんだろうが。どうしたら三回のドライブで五台をオシャカにできるんだ？」
ファランスは目を泳がせている。
「ま、まあ、そんなこともあったな」
ファランスは小型の発火装置を、少量の燃料が入っている缶に向かって投げた。
発火、火災。
「ぬお！　なにをする！」
ファランスにスパナを投げ付け、消化に走る。
「あだ！　ってー……わりぃが、こちらと人命、いや、人魂がかかってるんでね」
ファランスはおまけにもう一つ発火装置を投げて、近くにあった車に乗り込んだ。
「戻ってきたら覚えとけ！」
おやっさんの怒鳴りに片手を上げて返事を返すファランス。その様子を見てため息をつく。
「まったく、あんな無茶をしなくても頭下げりゃ貸してやったのに」

都市ルカより約百五十キロ東。
「ここ、か」
ファランスは基地の入り口検問所の前に立っている。
「どうも、自分はファランス中佐であります」
ファランスは検問所の監視員に敬礼する。
「ようこそファランス中佐殿！　今日はどのようなご用件でこちらに？」
たかだか正式軍服に国旗のエンブレムを縫い付けて、中佐の階級章チラつかせただけで友軍だと信用するなんて、大丈夫かこいつらとファランスは心で不満をぶつける。
普通はそれだけの理由があれば信用するが……。
「この基地にいるジンという者に会いたいんだが」
ファランスは敬礼を解いて言った。
「ジン中尉ですか。それでは基地内でお待ちください」
ファランスは監視員の一人に誘導されてグリーンマイルド隊の基地へと入っていく。

「なかなか広いな」
応接間らしき部屋で、紅茶を眺めながらファランスはソファーに座っている。
「失礼します」
ノックの後に青年が部屋に入ってきた。
「あなたがジン中尉なのか？」
確実に不釣り合いのしゃべり方をする。しゃべりにくそうだ。
「そうです。ファランス少佐、本日はどういったご用件で自分を尋ねたのですか？」
ジンはファランスの正面に座った。ファランスは左右を確認し、前後、上下も確認した。

「……ここにはカメラとかないのか？」
ファランスはジンの顔を見ながら言った。
「ええ、ありませんが」
ジンがそう言ったとたんに、突っ掛かりがとれたかのように椅子に深く座った。
「ふぃ～、堅っ苦しーな。息が詰まって死ぬかと思った」
ファランスは一つ大きなため息をついたあと、真剣な目でジンを見た。
「おまえ、付き合ってた女となにか約束しなかったか？」
ジンはビクッと反応した。
「な、なぜそれを！？」
ジンは目を見開いて驚いていた。
「……待ってるぜ、彼女」
ファランスは静かに言った。ジンは下を向いた後、ファランスを見た。いや、睨み付けた。
「あんたには関係ないだろ！」
いきなりの剣幕にたじろぐファランス。
「どこで俺たちのことを知ったのかは分からないが、あんたには関係ないだろ！」
ジンはファランスを睨み付け、前傾になっていた。
「まあ、確かに関係ねぇよ」
ファランスは立ち上がり、ジンのほうに歩み寄る。
「他人である俺には関係ねぇ。だけどよ……」
ファランスはジンの胸ぐらを思いっきりつかみ、自分に近付けた。
「だからどうした！　彼女は待ってんだ！　てめぇが来るって言って、ずっとな！」
ファランスはジンの胸ぐらを放し、かわりに手をつかんだ。
「行くぞ、彼女のとこに！」
そのまま部屋を出て出口に向かう。
「待ってくれ！　俺は……」

行かない、そう言おうとしたがそれ以上言えなかった。
途中、基地の兵士がそれを目撃して止めようとするが、ファランスはかまわず突き進んだ。
「急げや急げー！　って、やば！」
兵士が銃を構えて立っていた。
「すみやかにジン中尉を解放し、両手を頭の上で組んでください」
兵士の一人が、いわゆる降伏勧告をしてきた。
「わりぃが、こちらと時間がないんでね」
ファランスは、兵士たちに向かって小型煙幕弾を投げ付けた。
「うわ！　煙で前が！　ゲホッゲホ！」
ファランスは煙の中を突っ切る。そして、そのまま基地の出口に迎う。
途中、いくつも煙幕弾を使いつつ、なんとか脱出に成功した。

「……止めてください」
ジンが車に揺られながら言った。
「なんでだよ。これから彼女のとこに行くんだぜ？」
ファランスがジンのほうを向くと、ジンは拳銃をファランスに向けていた。
「……はいはい、止まりますよ」
ブレーキを掛けて車を止めた。ファランスは手を上げる。
「そのまま引き返してください」
ジンは真っすぐに拳銃を向けながら言った。
「なんでだよ。彼女が待ってんだぜ？　今行かないと……」
「ふざけたことを言わないでください！」
ジンは拳銃を前に突き出した。
「死んだエレナが俺を待ってるだって！？　そんなことあるわけないだろ！」

ジンの口調が変わった。
「夢物語じゃあるまいし、死んだものがそんなことするわけないだろ！」
ジンは怒りをあらわにして怒鳴った。
「いや、だから、幽霊バスが……」
ファランスが反論するが、拳銃を胸元に押しつけられて黙った。
「そんなの、ただの噂だろう！　あるわけ無い、幽霊バスなんて！」
ファランスは、ジンが必死になって、無理矢理否定していると見た。
「あんた、なんでそんなに強く否定するんだ？」
ファランスの問い掛けに一瞬、隙を作った。ファランスはその隙を見逃さず、ジンの拳銃を奪い、捨てた。
「どうしてそこまで否定する？」
ファランスは強く鋭い視線をジンに向ける。
「それは……たかが噂でしか……」
ジンは、はっきりしない言い方で言った。
「自分に嘘ついたって、何にもなんねぇぞ」
ファランスはやさしく言う。
「……認めたくないんだ」
ジンがゆっくりと口を開いた。
「認めたくないんだ、エレナが死んだなんて。死亡届なんてただの紙切れだ。彼女は死んでないんだ……認めない……」
ジンはフロントガラスを殴り、割った。
「俺が、俺がなんとかしていればよかったのに、自分の階級惜しさに……」
自分の腕から流れる血を見ながら、涙を流す。
「エレナに会わせる顔が無い。……俺が、殺したようなものだ」
ジンはファランスを見た。
「本当は、彼女の配属を変更できたんだ。……だけど、正当な理由もないのに配置換えなんかしたら、降格される」

ジンはゆれる地平線を遠い目で見た。
「ふ、はは……自分の階級惜しさに、大切な人を殺してしまったんだ……許されるはずが無い」
ジンは座席に深く座った。ファランスは再び車を発進させた。
「確かめにいこうぜ。彼女が、エレナがどう思ってるか」
ジンは、ファランスの言葉に力なくうなずいた。

「そら、来た」
ファランスはジンのほうを見る。ジンはうなずいた。
バスが二人の前に止まり、ドアを開けた。
「さあ、行こう」
ファランスが先に乗った。
「……エレナ」
ジンは意を決して乗り込む。
「……誰も居ない」
ジンはつぶやいた。ファランスがため息をついた。
「よく見ろ。あんたなら、見えるはずだ」
ファランスは親指を立てて、運転席側の三列目の座席を差した。
「……さ……ジンさ……」
ジンは一瞬、空耳かと思った。聞こえるはずの無い声が聞こえたからだ。
「エ……レナ」
ジンは、三列目に座る一人の女性を見た。口が開く。
女性はゆっくりと立ち上がり、中央の通路に立った。
「ジンさん……」
二度と聞くことができないと思っていた声。二度と見ることが無いと知っていた姿。今、すべてを覆して、そこにある。
「エレナ……エレナ！！」

ジンは駆け出し、エレナを抱こうとしたが、寸前で止まった。
「ジンさん？」
エレナが不安そうな顔をしてジンの顔を見る。
「……すまない」
ジンは悲しみに満ちた顔で言った。
「俺は、自分の階級惜しさにおまえを……」
ジンの言葉は続かなかった。エレナが抱きついたのだった。
「知ってますよ、それくらい。いいんですよ、もう、そのことで悩まなくて」
エレナは、ジンの涙を指で拭った。
「ちゃんと、約束通りに来てくれたんですから……」
ジンは、エレナをやさしく包み込んだ。
「すまない。俺は……」
ジンは強く抱き締めた。
「……もう、時間みたいです」
エレナがそう言うと、その体が光へと帰っていく。
「まってくれ！　まだ答を聞いてない！」
ジンが泣きだしそうな顔でエレナに言った。
「イジワルな人ですね。ジンさん」
エレナは、笑った。
「結婚、してほしいんだ」
ジンは、真っすぐにエレナを見つめた。

――はい

エレナは、光となり、天へと昇った。

ジンは、手を天へとかざした。

三日後。
「……どうだ？」
ファランスは、ジアシャスに尋ねた。
「ジン・フォグナー中尉は懲罰なしだって。どうやらアルバディア大佐がなんとかしてくれたみたい」
「本当か！？　ぃよっしゃー！」
ジアシャスの言葉に大喜びのファランス。
「いいの？　そんなに喜んで」
ジアシャスの言葉に首を傾げるファランス。
「君は向こう一ヵ月間、車庫でおやっさんの手伝いをむきゅう&むきゅうでやらされんだよ」
ジアシャスの言葉に固まるファランス。
「……あのー、その二つのムキューってのは、休みなし&給料なしってことっすか？」
ジアシャスは笑顔でうなずく。
「……今日はもう時間だから帰る！」
「あ～！　逃げたー！」
風のごとく基地を抜けるファランス。途中、ファランスに仕事を手伝わせようとする整備班たちに、発火装置や煙幕弾、さらには閃光弾まで投げ付けた。
なぜそんな装備なのかは謎。

「よし、撒いた！」
ファランスはバス停に立って、力強く言った。
「うん、来た！」
バスが姿を表す。
「よう、ご機嫌か？」
陽気なファランスにため息をつく運転手。
「……まったく、すこしは先代を見習って真面目に成仏屋やれ」
運転手は親指で後ろを指す。そこには昨日見かけた男性の魂が……。
「……マジかよ……三日前初仕事おわらせたばっかりだぜ？」
ファランスは落ち込んだ。運転手が肩に手を置く。何かを期待するファランス。
「一回で三人相手にするよりましだ」
期待を完璧に打ち砕かれたファランスは、今日も仕事をするのだった。

成仏屋『ファランス』として。

～ＥＮＤ～

（後書き）

終わりました。自分としては最高傑作ですが、いかがでしたでしょうか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0888b/

幽霊バス

2010年10月8日15時09分発行